

「平和があるように」

ヨハネによる福音書 20:19-23

今日は、主イエス・キリストの復活を記念するイースターです。イエスさまが私たちのために十字架にお掛になり、尊い命を捧げられたのち、3日目に甦られた喜びの日です。

「死人の復活」ということは、現代の私たちにとって、必ずしも分かりやすいことではありません。むしろ、理解しがたいことであり、信じがたいことであるかもしれません。このことは、当時のイエスの弟子たちにとっても、分かり難く、信じがたいことでした。

弟子たちにとって、救い主であるイエスさまが捕らえられて、十字架にはりつけにされたこと自体、受け入れられないことでした。イエスさまは、捕らえられる前、3度も弟子たちに言われました。「わたしは、エルサレムで必ず多くの苦しみを受け、十字架につけられて殺され、3日目に甦る」と。しかし、弟子たちにはそのことが、全く理解できなかつたのです。ですから、イエスさまが捕らえられた時点で、弟子たちはみな、イエスさまを見捨てて逃げ去ってしまったのです。イエスさまが十字架に磔にされたとき、それを最後まで見守ったのは、マグダラのマリアと数名の婦人たちだけであつたようです。

イエスさまが十字架の上で息を引き取られて3日目の朝早く、マグダラのマリアがイエスさまの亡き骸を収めた墓を訪ねて、墓が空であることに気づき、慌ててペトロたちに告げたのですが、ペトロたちはその空の墓を確認しましたが、イエスさまの復活を信じるには至りませんでした。

今日の聖書の箇所は、その日の夕方の出来事です。それぞれに逃げ隠れていた弟子たちが、エルサレムのある一軒家に密かに集まつたのです。イエスさまが、十字架にかけられて殺されたショックと悲しみに加えて、そのご遺体までがなくなつたという知らせに、彼らは大変驚き、もはやじつとしておられなかつたのです。一体何が起つたのだらう、心配になつて、事実を確認するために、集まつたのです。

彼らは、イエスさまを失つた悲しみと、イエスさまを見捨てて逃げ去ってしまった罪責感に打ちのめされておりました。さらにその上に、彼らの上に重くのしかかつていたのは、恐れと不安でした。

19節を見ると、「弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と記されています。イエスさまを捕らえて、十字架に引き渡した祭司長・長老・律法学者たちと彼らに扇動された群衆が、いつ自分たちを捕らえにやってくるか分らない、という恐れと不安に怯えていたのです。

私は、この場面を読むたびに、あの徳川時代から明治初期にかけての「キリシタン禁制」下で、役人の取り締まりや村人の密告を恐れて、必死に身を隠して、息を殺すようにして密かに集まつていた「隠れキリシタン」たちの姿を思い浮かべます。また、あの第二次大戦中、治安維持法による厳しい監視や弾圧のもとで、牧師が逮捕されたり、集會が禁じられたりした暗い不安な時代のことを思わずにはおられません。あの弾圧で

ホーリネス系の教会の牧師たち 134 名が検挙され、264 もの教会・伝道所が解散処分を受けたのです。

幸い、今、私たちは平和憲法のもとで「信教の自由」を認められ、そのような恐怖や不安から解放されていますが、二度とそのような暗黒の時代を来たらせてはならないと思います。

しかし、今の時代、私たちに恐れや不安が全くないかという、そうではありません。世にある教会は、常に少数者で、この世から異質な存在として見られることがあります。私たちはそのような孤立感にも耐えて、それを乗り越えていかなければなりません。

また、今は、世界中に蔓延している新型コロナウイルスの感染症のために、恐れと不安が広がっています。不要不急の外出を避け、人との交わりが制限され、蜜を避けるようにと言われ、みんなが孤立している状態です。教会の礼拝さえ、様々な制約を受けています。1年以上にわたる巣ごもり生活の中で、疲れを覚え、孤独感や不安から、心を病んだり、命を絶つような悲しい出来事が増えていると聞きます。

弟子たちの置かれている状況と、今の私たちの置かれている状況は全く違いますが、人との交わりや接触をさけ、恐れと不安の中で、閉じこもり、じっと寂しさに耐えているという点において、私たちも似たような状況にあると言えます。

しかし、神さまは、そのような不安と恐れの中にある私たちを決して見放したり、見捨てたりなさらないのです。神さまは、イエスさまを通して、私たちと共にいてくださることをお示しになったのです。そのことが、今日の聖書の箇所にはっきりと示されているのです。

弟子たちが、恐れと不安におののき、家の戸を閉め切って閉じこもっているところに、イエスさまが入って来られて、彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた、というのです。イエスさまは、かつて弟子たちに「わたしはあなたがたをみなしごにはしておかない」(ヨハネ 14:18)と言われました。そのことがここではっきりと示されたのです。十字架に死なれたイエスさまは、死に打ち勝ち、不安と恐れの中にある弟子たちの真ただ中に立たれたのです。

「あなたがたに平和があるように」。イエスさまはこう言われて、ご自分の手とわき腹をお見せになりました。イエスさまの手には、十字架にはりつけにされた時に打ち込まれた釘跡が生々しく残っていました。わき腹には、十字架の上で息を引き取られた時に、兵士によって突き刺された槍の傷跡が痛々しく残っていました。どうしてもイエスさまの復活を信じられない弟子たちに、イエスさまは「わたしだ、信じないものにならないで信じるものになりなさい」そう語りかけるように、ご自分の傷跡をお示しになったのです。

「あなたがたに平和があるように」。イエスさまはこの言葉をここで2度繰り返して語られました。

「あなたがたに平和があるように」。この言葉は、ユダヤ人たちが普通に挨拶の言葉として交わっていたアラム語の「シャローム」という言葉です。しかしイエスさまはこの言葉を、単なる挨拶としてではなく、本来の意味を込めて、「あなたがたに神さまから

の平和(平安)があるように」と語られたのです。これは、弟子たちへの心のこもった祈りの言葉でした。弟子たちはイエスさまの傷跡と、この祈りの言葉によって、イエスさまの復活を信じ、恐れと不安から解放され、「平安」を得たのです。「弟子たちは主を見て喜んだ」とあります。絶望し、恐れと不安の中にあった弟子たちに、大きな喜びと希望が与えられたのです。

イースターの喜びは、復活の主イエス・キリストとの出会いの喜びであり、「どんなときにも主が私たちと共にいてくださる」という「平和」(平安)に満たされることです。

「心に平和があるように」。イエスさまは2度目にこのように語られた後、さらにこのように言われました。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。復活の主イエスが弟子たちに与えた「平和」(平安)は、ただ単に、「平和だ、平和だ」と言って喜び、自己満足して、そこにあぐらをかいてしまうような、「安価な恵み」ではなく、主に遣わされて、この世に出て行き、多くの人に仕え、そこに平和を生み出し、造り出すことだ、と言われるのです。

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。イエスさまはこのように言われた後、弟子たちに「息を吹きかけて言われました。『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなた方が赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る』」。

「息を吹きかけた」という言葉から、私たちが思い起こすのは、創世記2章に、神さまが人をお造りになったとき、「土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」という場面です。人は皆、「土の塵」で造られた壊れやすい「土の器」ですが、神さまの命の息を吹き込まれ、生かされているということです。「人はこうして生きるものとなった」(2:7)と記されている通りです。

弟子たちは、復活されたイエスさまから新たに「命の息」を吹き込まれたことによって、新たな命を与えられ、新たな使命へと、送り出されることになったのです。その使命とは、罪の赦しの福音を宣べ伝えることです。イエスさまが、ご自分の命を懸けて人々の罪を贖い、それをとおして実現された罪の赦しの福音を、主イエスはこの弟子たちに宣べ伝えるように、託されたのです。

「聖霊を受けよ」やがて弟子たちは、主の聖霊に満たされ、一つとなって主の教会を立ち上げ、地の果て目指して、和解と平和の福音を宣べ伝えて行きました。

私はいつも思うのです。もしイエスさまが死人の中から甦らされず、弟子たちにご自身を現わさなかったなら、弟子たちは、あの恐れと不安に満ちた絶望の淵からとうてい立ち直ることは出来なかったのではないのでしょうか。また、もし弟子たちが、復活のイエスさまから「命の息」を吹き込まれることがなかったなら、彼らは、イエス・キリストの十字架の出来事を、罪の贖いの恵みとして受け止め、罪の赦しの福音を宣べ伝えることもなかったでしょう。イエス・キリストの復活がなかったら、キリスト教も教会もなく、私たちの救いもなかったことでしょう。

私たちのために十字架にかかれた主は、復活されて、今も生きて、私たちと共におられます。

私たちの七里教会は、4月から無牧となり、様々な不安と恐れの中にあります。ほん

とうに厳しい困難な時代のさ中で、皆さんがどんなに心細い思いをしておられるかと思ひます。しかし、イエスさまは言われました「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ 16:3)。このように語られた復活の主イエス・キリストは、この私たちの中心に立たれて、今も私たちに「平和があるように」と語りかけ、また、私たちに命の息を吹きかけて、「あなた方を遣わす」と、命じておられるのです。みんなで力を合わせて、「主の教会」を守り、さらにこの世にあって、隣人に仕え、和解と平和の福音を証しし、宣べ伝えていきたいと願ひます。

アーメン